

令和 4 年 4 月 20 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：17K12118

研究課題名(和文) 看護系大学の臨地実習におけるLDの可能性のある学生への支援方法に関する研究

研究課題名(英文) SUPPORTING STUDENTS WITH POTENTIAL LEARNING-DISABILITIES IN CLINICAL NURSING TRAININGS

研究代表者

村上 真理 (Mari, Murakami)

広島大学・医系科学研究科(保)・助教

研究者番号：10363053

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、看護系大学の臨地実習における学習障がい(以下、LD)の可能性のある看護学生への学習支援や進路支援の方法を明らかにすることを目的とした。その結果として、臨地実習では、臨床実習指導者や大学教員はLDの可能性のある学生への合理的配慮を踏まえ、目標や内容や評価を可視化する必要がある。進路選択では、学生の強みを活かした領域や職種を視野に入れ、本人や家族や専門家と連携し支援することが示唆された。今後は、臨床実習指導者や大学教員はもちろん、当該学生本人や家族や周囲の人々を対象とした教育研修機会が必要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

看護系大学における学習障がいの可能性のある学生への支援としては、合理的配慮を踏まえ、目標や内容や評価を可視化する必要がある。進路選択では、学生の強みを活かした領域や職種を視野に入れ、本人や家族や専門家と連携し支援することが示唆された。今後は、教員や指導者はもちろん本人や家族や周囲の人々を対象とした学習障がいに関する教育研修機会が必要である。それぞれの学生の特性に合わせて、教育が提供できる社会創りの必要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：Objectives: This study aimed to clarify the difficulties encountered by practical training instructors and university education staff in delivering clinical training to nursing university students with potential learning disabilities, and to consider solutions. Results: Five categories were extracted.

Conclusions: Our study revealed that training instructors and teaching staff experience difficulties when teaching students with potential learning disabilities. To overcome these difficulties, university educational staff, as well as students and families, need to be educated about the existence and value of support tailored to the characteristics of an individual's learning disability.

研究分野：助産学、看護教育学、妊娠・出産・子育て、保育環境

キーワード：看護系大学 大学生 学習障がい 教育的支援

1. 研究開始当初の背景

日本では、国連総会での採択後に、インクルーシブ教育の考えに基づき学習障がい (Learning disabilities 以下、LD) のある学生への支援教育が導入され、2016年に合理的配慮として障がいのある大学生への支援が改善され始めた¹⁾。看護をはじめとする保健医療系の大学においても、LDと診断される学生は、年々増えている²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾。本研究で取り扱う学習障がいとは、文部科学省によれば「聞く」「話す」「読む」「書く」「計算する」「推論する」といった基礎的能力のうち、一つないし複数の特定の能力についてなかなか習得できず、うまく発揮することができないことで、学习上、様々な困難に直面している状態と定義される⁶⁾。

日本の看護大学教育において臨地実習は、学生が学士課程で学んだ教養科目や専門基礎科目の知識を基に、専門科目として知識・技術・態度を統合、深化し、検証することを通して、実践へ適用する能力を修得する授業である⁷⁾。看護基礎教育プログラムの一つとして臨地実習は、知識の統合と応用する基礎的能力が不可欠である。LDの特性から、講義や演習の段階では潜在化しにくかった問題=困りごとが、臨地実習では顕在化する。例えば、ケアに優先順位をつけることができない、看護記録が提出期限までに記載できない、対象者やグループメンバーや指導者とのコミュニケーションの障壁、アセスメントの説明や記録ができない、投薬量の計算ができない、臨機応変に対応できない、メンタルヘルスの障がいなどである⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾。これらの問題は、実習の本質的な目標を達成することを阻害する。

先行研究では、LDの生徒個々の学修ニーズに応えるために、教員は、障がい名で理解するよりもどういった学習場面で困難を示しているのかといった視点で、彼らを理解する姿勢が必要である¹³⁾。学習障がいのある看護学生は、学校に良い看護師になるための適応経路を開発することを求めている¹⁴⁾。TerriとZanaは、教育者が努力すれば障がいをもつ看護学生は有能な看護師になる可能性があるとして、他職種連携の必要性を示唆した¹⁵⁾。これまでの研究に基づき、看護臨床実習につまずき、看護訓練で学習困難に直面する学習障がいを持つ学生への支援の必要性に着目した。

日本では、発達障がいのある看護学生への具体的な支援方法は提示されはじめている¹⁶⁾。しかし個人の特性に合った支援方法についての報告は少ない。そこで本研究の目的は、看護系大学の臨地実習におけるLDの可能性のある学生へ関わった臨床実習指導者や大学教員の困難さを考察することで、当該学生への学習や進路支援のあり方を検討することを目的とした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、看護系大学の臨地実習におけるLDの可能性のある学生と関わった臨床実習指導者や大学教員の困難さから、当該学生への学習支援のあり方を明らかにすること、とした。

3. 研究の方法

1) 看護系大学における学習障害のある学生の実態把握

先行研究や既存文献から看護系大学生で学習障がいのある学生の実態を把握した。期間は2017～2019年度とした(途中、産育休暇による中断あり)。

2) 質的記述的デザインによる調査

(1) オンラインフォーカスグループインタビュー

当初は、参集型のフォーカスグループインタビューの予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大により、参集型は困難と判断したため、オンラインによる方法へ変更した。

(2) 期間

2020年度に倫理申請の変更届を作成し、上記1)の結果からインタビューガイドを作成し、2021年度にデータ収集と成果報告をした。

(3) データ収集

3つのフォーカスグループインタビューが実施され、各インタビューに3人が参加した。オリジナルインタビューガイドに基づき、新型コロナウイルス感染症拡大を防ぐために、対面ではなくMicrosoft Teamsを使用して約90分間インタビューした。各フォーカスグループは許可を得て録音され、参加者が詳細な回答をするように設計された半構造化面接プロトコルに同意した研究者が主導した。3つの質問は次のとおり。LDの可能性のある看護学生への対応に伴う困難についてどう思うか。LDの可能性のある看護学生との臨床実習における学習支援についてどう思うか。LDの可能性のある看護学生の進路選択のサポートについてどう思うか。

(4) データ分析

データから個人情報を匿名化した逐語録が作成され、質的内容分析が行われた。インタビューの逐語録は、NVivo ver. 1.6ソフトウェアで分析された。「困りごと」に関連する部分を抽出し、意味内容の類似性で分類しサブカテゴリからカテゴリを生成した。

(5) 信頼性

定性的調査(COREQ)の推奨事項を報告するための基準に従った¹⁷⁾。転送可能性を確保するために、方法論とデータ収集プロセスの詳細な説明、および調査結果を提示する際に直接引用された。信頼性は、参加者との各フォーカスグループインタビューの後に逐語録を読むことによ

で確認された。信頼性は、看護教育の教授らによる分析プロセスを確認することで確保された。適合性は、逐語録からのカテゴリ生成のプロセスを3回繰り返すことによって確認された。

(6) 倫理的配慮

本研究は、広島大学疫学倫理委員会によって承認を得た後、実施した。

4. 研究成果

1) 参加者

看護大学生への実習指導経験のある9名(女性8名、男性1名)がオンラインフォーカスグループインタビューに参加し、都合に合わせて3グループ3グループを結成した。彼らの職業は、保健師、助産師、登録看護師、学校看護師、大学の教員だった。卒業後の平均年数は15.4年(最短8年から最長21年)だった。

2) インタビューデータ

インタビューデータから、5つのカテゴリが、抽出された。すなわち【看護学実習中という短期間で学生に合わせた方策の模索】【日本の伝統的な集団主義教育とはあまりにも異なる個別対応への抵抗】【学生の依怙臆戻になってしまうのではないかという葛藤】【限界を見極めてしまうことへの躊躇】【特性ゆえの困難さを支援する障壁】であった。

3) 考察

参加者は、全員臨床実習指導の経験を有するベテランの看護師・助産師・保健師・養護教諭・大学教育スタッフであった。彼らは、幅広い職種経験を活かし、学習障がいのある学生との困難なエピソードや支援方法について非常に有用な語りを提供したと考えられる。

臨床実習指導者や大学教員は学習障がいのある学生に対して【看護学実習中という短期間で学生に合わせた方策の模索】をしていた。そこで、臨床実習指導者と大学教育スタッフが学習障がいを学び¹⁸⁾¹⁹⁾、合理的配慮を啓発する必要があると示唆された。合理的配慮とは、大学等が個々の学生の状態、特性等に応じて提供するもので、多様かつ個別性が高いものである¹⁾。教育スタッフ個々の工夫ではなく、大学組織として明確なルールを設け当該学生の要望を受けて、大学側が妥当かどうかを検討した上で提供されるべきだが、未だ正しい理解が浸透していない可能性が示唆された。

臨床実習指導者や大学教員は、彼らが受けてきた【日本の伝統的な集団主義教育とはあまりにも異なる個別対応への抵抗】を学習障がいのある学生に感じている。日本の集団主義教育は、集団との強い連帯感を持って個人の自立を促進し、「One for all, all for one」に基づき集団の団結と規律を獲得する²⁰⁾²¹⁾²²⁾。おそらく、これは教育スタッフの思考基盤に根付いており、小学校・中学校・高等学校での教育に影響されたと推察される。対照的に、学習障がいのある学生のためにさまざまな学習方法をサポートするには、個々のニーズを理解する必要がある¹³⁾。教育スタッフは、自分が今まで受けてきた教育と、学習障がいのある学生を教育者として初めて支援するという不慣れさに過度のギャップがあるため、抵抗を感じてたと考えられる。したがって、看護教育スタッフが伝統的な集団主義教育を払拭し、現代の個別教育を受け入れることができるように、学習障がいのある学生の特徴を理解することが必要である²³⁾。それらをサポートするための学習機会を提供する必要がある。

周囲の人々の理解が得られなければ、【学生の依怙臆戻になってしまうのではないかという葛藤】を生じることがわかった。倫理規定の公平性の原則に精通している看護教育者は、学生に対して公正に行動しようとする²⁴⁾。その結果、個々の学生が特定の学生に対処しようとするほど、教育スタッフが対立を経験する可能性が高いと推察された。さらに、学習障がいのある人々の社会的スティグマを排除することはできない²⁵⁾。したがって、すべての専門家は強力な価値基盤を持ち、権利、包含、選択、独立の原則を採用する必要がある²⁶⁾。適切なサポートを行うには、サポートを受ける学生だけでなく、教育スタッフも肉体的および精神的なストレスから解放される必要がある。そのため、学習障がいのある学生を支援するだけでなく、教育スタッフや周辺の人々を専門スタッフがメタサポートする、学生自身を含むプロジェクトチームを形成¹⁶⁾する必要があると示唆された。

大学教員は、臨床看護実習で学習障がいのある学生の【限界を見極めてしまうことへの躊躇】があった。将来、障がいのある看護学生が有能になる能力は、教育者の影響を受けるため²⁷⁾、限界を見極めることは不適切な可能性がある。学力の高い学生は学習を続け、社会的感情を強めることができるため²⁸⁾、限界を知ること、真剣に自分の強みに立ち向かい、キャリアの選択を求めることができるとも考えられる。これは、学生が臨床看護実践の弱点に立ち向かう良い機会があるという、本研究結果から裏付けられる。有望な青年期の学生の限界を見極めるには賛否両論があり、さらなる研究が必要である。

学習障がいのある学生のもつ【特性ゆえの困難さを支援する障壁】が様々あることが明らかとなった。学生の特性に合わせた支援方策が不明なことが原因の一つであろう。そこで、本研究結果と先行研究を踏まえ、次の支援策を提案する：指示内容をうまく聞取れない学生には強調色の文字で短く視覚で示し音声記録を利用する²⁹⁾；順序だてては話すことができない学生には時間をかけて傾聴し話したことを要約する；資料の読み取りがうまくできない学生にはユニバーサルデザインを使いフォントを大きくし文字量を減らす；看護記録を書くことができない学生には時間を割いて内容を一緒に表出し、文字起こしアプリを使う²⁹⁾；情報からアセスメントができない学生には一緒にメモリーツリーや図を利用する；グループワークに参加できない学生に

は集団人数を小さくし、ポジティブフィードバックに努める³⁰⁾; スティグマのある学生には従来の教え方に固執せず学生の特性を認めよう。

全体として、臨床実習指導者や大学教員は、学習障がいのある学生とその周囲の人々をサポートチームとして認識し、日本の看護大学の臨床実習における学生に関連する困難を解決するために互いに学び合う必要がある。さらに、大学は社会組織の一員として、合理的配慮を提供するために、学習障がいに関連する教育活動に責任を持ち、積極的に取り組む必要がある。

4) 本研究の限界と課題

第一に、参加者の意見は広く適用可能または包括的ではない可能性がある。第二に、日本では学習障がいの診断を受入れ公表する看護学生がまだまだ少ない。ゆえに、参加者はフォーカスグループインタビューで「学習障がい」の認識があいまいのまま語った可能性がある。加えて、学習障がいは、自閉スペクトラム症や注意欠陥多動性障がいと複合することもあるが本研究では言及していない。第三に、本研究では新型コロナウイルス感染症拡大期に行われたため、感染対策としてオンラインによるフォーカスグループインタビューでデータ収集をしたが、対面でのフォーカスグループインタビューとの違いは、吟味できていない。

5) 結論

本研究結果は、看護系大学の臨地実習において学習障がいの可能性のある学生を支援するために、大学の教育スタッフ、および学生と家族は、個人の学習障がいの特性に合わせたサポートの存在と価値について教育を受ける必要がある。さらに、日本の大学組織における学習障がいの特徴に合わせた支援を提供するには、学生や他の学生やその家族を含む周辺の人々に関わる教育スタッフを教育する必要がある。社会の意識を向上するには、さらなる研究が必要であることが示唆された。

【引用文献】

- 1) 日本学生支援機構 (2018): 合理的配慮ハンドブック～障がいのある学生を支援する教職員のために～
- 2) Gray, C.P., Burr, S.A. (2020): Timing is key to providing modified assessments for students with specific learning difficulties. *Perspect. Med. Educ.* 9, 49–56.
<https://link.springer.com/article/10.1007/s40037-019-00553-4>
- 3) 日本学生支援機構 (2019): 令和元年度 (2019 年度) 大学, 短期大学及び高等専門学校における障がいのある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書
https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_shogai_syugaku/_icsFiles/afiedfile/2021/10/01/report2019_rev03.pdf
- 4) 日本学生支援機構 (2018): 平成 30 年度 (2018 年度) 大学, 短期大学及び高等専門学校における障がいのある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書
https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_shogai_syugaku/_icsFiles/afiedfile/2021/02/10/report2018_2.pdf
- 5) 日本学生支援機構 (2017): 平成 29 年度 (2017 年度) 大学, 短期大学及び高等専門学校における障がいのある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書
https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_shogai_syugaku/_icsFiles/afiedfile/2021/02/10/h29report.pdf
- 6) 文部科学省 (2021): (8) 学習障がい
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/mext_00808.html (参照 2022/1/19)
- 7) 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 (2020): 看護学実習ガイドライン
https://www.mext.go.jp/content/20200330-mxt_igaku-000006272_1.pdf
- 8) Anna T.C (2019): Perceptions of the possible impact of dyslexia on nursing and midwifery students and of the coping strategies they develop and/or use to help them cope in clinical practice. *Nurse Education in Practice*, 35, 90-97
- 9) Ruth, N., Michelle, P., Neil, J., et al. (2015): Research teaching in learning disability nursing: Exploring the views of student and registered learning disability nurses. *Nurse Education Today* 35, 1155-1160. <https://doi.org/10.1016/j.nedt.2015.05.003>
- 10) Kristine, M, L. (2019): Clinical education of nursing students with learning difficulties: An integrative review (part 1). *Nurse Education in Practice* 34, 173-184.
<https://doi.org/10.1016/j.nepr.2018.11.015>
- 11) 師岡友紀、望月直人、荒尾 晴恵 (2019): 発達障がいまたはその傾向がある看護学生に対する臨地実習上の支援の実態と教員の支援の妥当性に関する認識. *大阪大学看護学雑誌*, 25(1), 81-88. https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/71345/njou25_1_081.pdf
- 12) 中村裕美, 高橋幸, 福井彩水, 他 (2019): 発達障がいおよびその疑いのある学生に対する看護系大学教員の関わりの現状と支援のあり方. *看護教育研究学会誌*, 11(1), 47-55. <http://www.nihonkango.jp/journal/11-1/11-1-5.pdf>
- 13) 湯澤美紀, 河村暁, 湯澤正通 (2014): ワーキングメモリと特別な支援: 一人ひとりの学習のニーズに応える. 北大路書房, 京都.

- 14) Reep-Jarmin, Jacqueline Lee (2016) : The meaning of nursing education as described by students with learning disabilities . Theses and Dissertations. 956.
- 15) Terri J, Zana M (2013) . Nursing educators' perspectives of students with disabilities: A grounded theory study . Nurse Education Today 33 . 1316–1321.
<https://doi.org/10.1016/j.nedt.2013.02.018>
- 16) 北川明(2020) : 発達障がいのある看護職・看護学生支援の基本と実践. メジカルビュー社 , 東京 .
- 17) Tong, A., Sainsbury, P., Craig, J. (2007) : Consolidated criteria for reporting qualitative research (COREQ): A 32-item checklist for interviews and focus groups. Int. J. Qual. Health Care. 19, 349–357. <https://doi.org/10.1093/intqhc/mzm042>
- 18) L'Ecuyer, K.M., 2019a. Clinical education of nursing students with learning difficulties: An integrative review (part 1). Nurse Educ. Pract. 34, 173–184.
<https://doi.org/10.1016/j.nepr.2018.11.015>
- 19) L'Ecuyer, K.M., 2019b. Perceptions of nurse preceptors of students and new graduates with learning difficulties and their willingness to precept them in clinical practice (part 2). Nurse Educ. Pract. 34, 210–217. <https://doi.org/10.1016/j.nepr.2018.12.004>.
- 20) 青井和夫 (1958) : 集団教育論 . 教育社会学研究 , 13 , 134-151 .
<https://doi.org/10.11151/eds1951.13.134>
- 21) 広川正治 (1964) : 集団主義教育の諸問題 . 北海道学芸大学紀要. 第一部. C, 教育科学編 , 15 (1) , 1-12 . <http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/3884>
- 22) 高野陽太郎、纒坂英子 (1997) : “日本人の集団主義”と“アメリカ人の個人主義”通説の再検討 . 心理学研究 , 68 (4) , 312-327 . <https://doi.org/10.4992/jjpsy.68.312>
- 23) Allan, H.T., O'Driscoll, M., Simpson, V., Shawe, J. (2013) : Teachers' views of using e-learning for non-traditional students in higher education across three disciplines [nursing, chemistry and management] at a time of massification and increased diversity in higher education. Nurse Educ. Today. 33, 1068–1073.
<https://doi.org/10.1016/j.nedt.2012.04.003>
- 24) Salminen, L., Metsämäki, R., Numminen, O.H., Leino-Kilpi, H. (2013) : Nurse educators and professional ethics—Ethical principles and their implementation from nurse educators' perspectives. Nurse Educ. Today. 33, 133–137.
<https://doi.org/10.1016/j.nedt.2011.11.013>
- 25) Shaw, S.A. (2009) : Drawing on three discursive modes in learning disability nurse education. Nurse Educ. Today. 29, 188–195. <https://doi.org/10.1016/j.nedt.2008.08.007>
- 26) Bollard, M., Lahiff, J., Parkes, N. (2012) : Involving people with learning disabilities in Nurse Education: Towards an inclusive approach. Nurse Educ. Today. 32, 173–177.
<https://doi.org/10.1016/j.nedt.2011.10.002>
- 27) Ashcroft, T.J., Lutfiyya, Z.M. (2013) : Nursing educators' perspectives of students with disabilities: A grounded theory study. Nurse Educ. Today. 33, 1316–1321.
<https://doi.org/10.1016/j.nedt.2013.02.018>
- 28) Hwang, E., Shin, S. (2018) : Characteristics of nursing students with high levels of academic resilience: A cross-sectional study. Nurse Educ. Today. 71, 54–59.
<https://doi.org/10.1016/j.nedt.2018.09.011>
- 29) Crouch, A.T. (2019) : Perceptions of the possible impact of dyslexia on nursing and midwifery students and of the coping strategies they develop and/or use to help them cope in clinical practice. Nurse Educ. Pract. 35, 90–97.
<https://doi.org/10.1016/j.nepr.2018.12.008>
- 30) Wray, J., Aspland, J., Taghzouit, J., Pace, K. (2013) : Making the nursing curriculum more inclusive for students with specific learning difficulties (SpLD): Embedding specialist study skills into a core module. Nurse Educ. Today. 33, 602–607.
<https://doi.org/10.1016/j.nedt.2012.07.009>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 村上真理
2. 発表標題 看護系大学の臨地実習における LD（学習障がい）の可能性のある学生への支援方法に関する研究
3. 学会等名 第41回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------